

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K02	氏名	竹内 三千代
研究主題 —副主題—	「特別支援を要する児童の理解と個を伸ばす支援の研究」 ～学校組織における支援の在り方を含めて～		
所属校	練馬区立大泉東小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>平成14年に行われた文部科学省の調査でも、小学校等の通常の学級にも発達により支援を必要とする児童が多数存在する可能性が明らかになった。現場でも、そうした課題をもつ児童が急激に増えてきていると実感している。年々状態の重篤な児童が増えており、担任の努力だけでは対応に限界を感じる場合が増えている。そこで、今、現場では担任に任せるばかりでなく、学校組織として対応していくことが大切になってきている。そうした事態の改善のために、文部科学省も特別支援教育の体制整備を行う事業を全国的に展開している。</p> <p>しかし体制を整え、組織的に取り組もうとはするものの、学校現場ではやはり担任の努力に頼るところが大きい。そうした状況を改善し、多彩な人材を擁する学校というチームの力を有機的に生かした学校組織の在り方を模索することは、特別な支援を要する児童を多角的に理解し、よりよい支援をしていく上で大きな力になると考えた。</p>
II 研究の方法	<p>これまでの自己の実践を振り返り省察するとともに、先進的な取り組みを実践している学校の実践について調査研究を行っていく。3校を比較し、さらに文献研究をしていくことで、よりよい組織的支援の在り方を考察していく。また、多くの教育理論の中から可能性のある取り組みを探っていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 研究校の訪問とインタビュー (A校)</li> <li>(2) 研究校の訪問とインタビュー (B校)</li> <li>(3) 自らの実践と振り返り (C校)</li> <li>(4) 学校体制の工夫の実態について分析</li> <li>(5) よりよい学校体制の提案</li> <li>(6) 担任としての関わりと学びからの可能性</li> </ol>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>(A 校の学校体制)</p> <p>「どの子にも特別支援」「すべての教職員で一人一人の子供を育てていく」との理念のもと“気軽に相談できる・日常的に子供の様子を見合う同僚性”が醸成され、それが効果を生むことで“専門性”が養われている。</p> <p>特にキーパーソンとなる教員が確かな児童理解と情報の共有を行った上で早期に個々のケースに応じた支援体制を組んでいることが予防的支援につながっている。校内委員会というチームで支援を考え、実践し、評価して見直すという行動の連携を継続的に行っていることが組織的支援を成功させている。</p> <p>(B 校の学校体制)</p> <p>コーディネーターが主催するミニケース会議で担任支援を継続的に行い、必要があるときには、早期に管理職が行政に働きかけると臨時的にアドバイザーが来校し、専門的な目で見取ることで予防的支援を行っている。「みんなで一人の子を見ていこう」との意識が学校風土としてあり、児童に多動・粗暴の傾向がある場合には全教職員による行動の連携が組織される。</p> <p>(C 校の学校体制)</p> <p>スクールカウンセラーと心の教育相談員が配置されており、担任とカウンセラーによるミニ会議を中心に支援が進んでいるため、担任の主体性が大切にされるとともに、小回りの利く動きができる良さがある。必要に応じて行動の連携体制を生み出していく必要がある。</p> <p>3校を訪問の上インタビューし、分析した結果、望ましい校内体制としてある一定の形が存在するわけではないことが分かった。自治体や学校によって支援員やスクールカウンセラーなど活用できるリソースの様子も違う、管理職の個性や考え方、教職員の専門性や学校風土など全てが違っている。一つとして同じ学校はないのだというところから考え始めなくてはいけないと実感した。そうした環境の中で、自校ではどこを生かすことが組織として大きな力を生むことになるのか、より大きな価値を生むのかを考え、自校にとって最も適した校内体制を作り出す必要がある。そのために多くの教職員の自発的な努力があることを、本研究を通して認識した。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>望ましい校内体制は必ずしも一定のものではないが、どの学校でも欠かせないと考えた点、有効活用しようと感じた方法を中心に、よりよい学校体制の例について考えることができた。</p> <p>～校内体制構築のためのベース作りのために～</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 理念の共有がなければ行動の連携を生み出すことは難しい。</li> <li>② 開かれた学級と同僚性の構築が情報と行動の連携を生み出す。</li> <li>③ 学び合う実践の継続が充実感を生み、同僚性と専門性を育てていく。</li> </ol> <p>～ケースに応じた連携を作り出すために～</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① キーパーソンの動きの重要性と配置の工夫</li> <li>② チームでの支援のために一援助チームシートの有効性</li> <li>③ 全ての教職員で行動の連携を一多くの教職員がかかわる工夫</li> </ol> <p>～縦横に広がりをもった連携のために～</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 情報の連携のために一個人情報ファイルの作成と個別の指導計画作成についての配慮</li> <li>② 縦の連携をより長く綿密に一就学前の聞き取りの工夫他</li> <li>③ 保護者に対するアプローチ</li> <li>④ 学校も一つのチーム一外部機関と窓口の明確化</li> </ol> <p>～児童の環境をよりよいものに一担任支援のために～</p> <p>《ユニバーサルデザインの発想に基づいた指導の提案》</p> <p>《特別な支援を要する児童を包み込む授業と学級経営の提案》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 受容体験の積み重ねと、受容できる学級作り</li> <li>② ルールとパターン化一そこからのリレーション</li> <li>③ 学級集団の社会性を育てていくための手法の取り入れ</li> <li>④ 子供同士のつながりがあり、成就感ある授業</li> </ol>